

『看護師専用 お悩み外来』

著者とともに悩み、迷い、
そして楽になれる本

著者：宮子あずさ

定価：1,680 円(本体 1,600 円＋税 5%)

発行：医学書院

TEL：03-3817-5657



私は、学生時代に弁論大会の壇上で、本書の著者から講評を受けたことがある。現役ナースでありながら、著者はすでに広く執筆活動をされており、学生の拙い思いにも真摯に耳を傾けてくれたことを覚えている。

Q & A 形式で書かれたナースの『お悩み』は、そこにある問題の根幹を見つめ、丁寧に読み解かれる。「ほめようがない後輩をどうほめたらいいのか?」には、従来の「厳しくて当然」だった看護教育に触れ、「『指導』『教育』の名のもとに、力のある者が、弱い立場にある人をいたずらにおとしめたり、好みに合わない人を排斥したりする。こうした事態は、どこでも起こりうる」と答える。先の弁論大会で私が投げかけた訴え「なぜ学生は実習であんなに厳しくされるのか」の時と、著者は変わらない答えをくれた。

読後、本書に抱く楽さは何か、と考えた。イラストにあるように、カウンセリングルームのドアを開けた読み手は、こじれた問題を解かれる感じがするからだろうか。これまで、「まんじゅうを食べ続ける糖尿病の患者さんの QOL と看護師の抱くやるせなさ」について、どの書が教えてくれただろう。くよくよする自分を、悩み続けてよいのだと誰が励ましてくれただろう。著者は、決して『お悩み』を否定しない、言い切ることもしない。「わからないから一緒に考え続けよう」と言う。

「患者への受容と共感」という改めて言うには気恥ずかしい『お悩み』についても、「私にとっても、かなり本質に触れる問題」と返される。障害児の治療を拒否する親に対しては、著者も「重い悩みで取り上げるかどうか」迷う。また、四肢麻痺で死を希望する患者さんや、モルヒネを拒否する終末期の患者さんのケアに明快な答えはない。しかし、読んでいて違和感がないのは、著者自身が紛れもない当事者であり、今も悩み続けるナースとして存在しているからだろう。

登場する『お悩み』は、個人のレベルから医療全体にまつわる大局を往き来する。頻回に鳴るナースコールに対応する苦しさから、暴力、医療格差、フェミニズム、医療倫理にまでわたる謎説きは、看護ケアが広く社会化される感じがした。問題の深層には、ナース自身の「自己評価の低さ」があるとしながらも、その「子どもっぽく」かつ「難儀」な仕事を好きだと述べる。著者は厳しく、温かい。

著者は、対面したナースに語りかけるように質問に答える。現在、教育現場に身を置く私は、看護の根源に触れているような印象をもちながら読んだ。一方、ナースの私個人としては、自ら迷い考えるこんな師長のもとで働くことができたなら、あと3年は現場にいられたかもしれない、そう思い、今のナースをうらやましく思った。